
summer memory

みみかき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

summer memory

【Nコード】

N9692U

【作者名】

みみかき

【あらすじ】

幼なじみが事故で記憶を失った。
しかし、その事故には不明な事が…
幼なじみの記憶は戻るのか…
✠タイトルは変更になるかもしれません

第一話

春が過ぎ、去年より少し早くから暑くなり始めた。
気温が高い昼時に、一人の少年が街中を走っていた。

事は十分ほど遡る…

数日前に幼なじみと喧嘩し、一人でブラブラと店を回っていると、
携帯が震えた。

開いてみると、母親の名前が表示されていた。

「はい…うん、…：…っ！？…え…ああ…わかった…」

電話を切るなり少年は走り出した。

電話の内容は幼なじみが事故にあって病院に運ばれたが、大きな
外傷は無かった。しかし、目を覚ました幼なじみは記憶喪失になっ
ていた。という事だった。

病院に着いた彼は、受付で病室をきいた。305号室と聞き、三
階へと階段を駆け上がった。

病室の前には少年の母、紅羽幸芽【こうばこうめ】がいた。

「澄斗【すみと】！」

「母さん…緒里【いおり】は…？」

「多分起きてるわ…病室にいる…」

「何で…こんな…」

「私も詳しくはきいてなくてね…つく…緒里ちゃんがああだし…うう…目撃者もいな…つくて…人通りの少ない道路に倒れてたんだって。ぶつかっただような傷があったみたいで…事故だらうって…え…」

幸芽は泣きながら伝えた。

しかし涙を拭って息子の目を見て言った。

「会えば辛い思いをする。きっと二人ともね。それでも…」

幸芽は小学生のような容姿をしているが真面目な話をする時はしっかりとした芯持ち、急に大人になる。

それは澄斗もよくわかっていて、彼も幸芽の目を見て言った。

「俺はこの間あいつと喧嘩したんだ。緒里が俺に一方的に怒ってたんだけど、何で怒ってたのかわかんねんだよ。もしかしたらそれが原因で…あいつが記憶を取り戻すのを手伝いたい。だから会う。」

「…良かった…えへへ…会わないって言ったらぶん殴ろうかと思ってたわ。」

「サラッと恐いこと言わないでくんない？」

「絶対あの子の前で泣かないで。それだけは約束。いい？」

「…ああ…」

自然に二人の小指が絡まる。

二回上下に降り、澄斗は病室に向かった。

第二話

浅く息を吐き、扉をノックした。

中から聞き慣れた声が聞こえた。

澄斗は緊張しながら扉を横に引いた。

ベッドの上に座っている少女がいた。

「えと…すみません…私…」

少女は申し訳なさそうに頭を下げた。

「俺は紅羽澄斗っていうんだ。お前の幼なじみ。」

「そう…なんですか…そんなに近い人なのに…私は…」

「緒里が気にする事じゃねえよ。」

「でも…」

話せば話すほど緒里はマイナスの方向に向かっていった。

「怪我とかは大丈夫なのか？今日はゆっくり休んだほうが良い？」

「掠り傷とかなので特には…でも記憶が無いからなのか…頭が混乱してて…」
「そっか…そうだよな。じゃあ俺、今日は帰るわ。やっぱり休んだ方がいいよ。」

「無理に思い出そうとしなくていいから。ゆっくりでいいよ。…明日また来る。」

澄斗は緒里の頭を軽く撫でながら言って病室を出た。

「こうば…すみと君…か…駄目だ…分かんない…」

澄斗が病室を出た後、緒里はなんとか思い出そうと頭をかきむしっていた。

けれどやっぱり思い出す事は出来ず、頭を抱える事になる。

「無理に思い出そうとしなくていいって言われても…やっぱり不安なんだよ。自分が何なのかも分かんないんだもん…」

一人きりになった病室で呟いた声は誰の耳にも届く事なく、寂しく響いた。

第三話

「ただいま」

澄斗が帰宅すると、先に帰っていた幸芽が玄関まで来た。

「おかえり。晩御飯はもう作っちゃってあるの。お風呂入りたいなら今…っ…」

澄斗の目から涙が溢れているのにようやく気が付いた。

「すみ…と…」

「あいつの…緒里の前では泣かなかった。けど…何で…本当に何も覚えてないなんてっ…声も顔も、全く変わらないんだよ。でも俺の事も…何も…っ…」

幸芽は息子の頭を撫でようと、背伸びして手を伸ばしたが届かなかった。

代わりに頬を伝う涙を手で優しく拭いながら言った。

「よく堪えたわねえ。えらいえらい。緒里ちゃんは目の前で泣かれてたらきつと困ってたわよ？ものすごく。でも…澄斗だって辛いよね…今は我慢しなくてもいいんだよ…」

澄斗の中で限界まで張り詰めていた糸のようなものが切れた気がした。

自分が泣くような年では無いことも忘れていた。

「う…あ…つく…つ…いあ…あ…」

目から溢れ出る涙はしばらく止まることは無かった。

「落ち着いた？そろそろお腹すいたでしょ」

「ああ…うん」

「じゃ、リビング行きましょっか」

『にゃー』

「お。来てたのかジャムー」

「うん。私が病院から帰ってきた時に近くにいたから。入る？って言ったら付いて来て」

ジャムと呼ばれた猫は数年前から澄斗や緒里と一緒にいる猫である。

子猫だったジャムを小さい頃の緒里が発見し二人で可愛がっていた。

近所でもなかなか有名な猫で、飼い猫にしようとした家も少ないが何日かすると姿を消してしまうという不思議な猫だ。

「こいつの事も忘れてるんだろうな…」

『にゃー？』

「ご飯温めたわよー」

「いただきます」

「はいどうぞー」

いつもよりも少し遅くに紅羽家の夕食が始まった。

第四話

「聞き出そうとは思って無かったんだけどさ…」

食器のぶつかる音しか響いていなかった中、ぽつりと幸芽が呟いた。

「澄斗、緒里ちゃんと喧嘩したって言うてたじゃない。何で…喧嘩なんてしたの？」

「それは…」

「どうしても言いたくなかったら別に無理して言わなくていいのよ。ただ…気になっちゃっただけ…二人が何日も仲直りしない事なんてあんまりなかったじゃない」

「分かんないんだよ…珍しく緒里が俺にかなり怒ってた。でも何で怒ってたのが全然分かんねえ…」

・ 数日前

「紅羽君ーちよつといい？」

澄斗がクラスの女子に呼び出された時、隣にいた緒里の肩が少し揺れた。

「ん。悪い緒里。ちよつと行ってくる。何なら先帰っててもいいけど」

「うつん、待ってる。」

「悪いな。じゃ、行ってくる。」

「帰ろうとしてたとこ悪いわね。もうすぐ夏休みでしょ？そしたら夏祭りやるじゃない、いつもの神社で」

「毎年の事だな」

「そ。紅羽君、今年一緒に行く人いないんだったら私と行かない？」

澄斗は毎年この祭に緒里と来ていた。

小さい頃から毎年毎年。

「でも俺、毎年緒里と行つてて…」

「石坂【いしざか】さんと約束したの？」

「いや…約束したわけじゃないけど毎年だし…」

「石坂さんと毎年行ってるなら飽きるんじゃない？今年は私とじゃ駄目なの？」

「飽き…っ？」

「それにいー石坂さんだつて友達いないわけじゃないでしょ？少なくともその子達と行くわよ」

「おい…」

「私と夏祭り、行つてくれるの？くれないの？」

「誰が…」

「あーそうそう。行つてくれないなら私の石坂さんに対しての愚痴でも聞いてくれない？最近イライラしてんのよ」

相手はさっきから澄斗の発言を許さないように被せながら話してくる。

澄斗は絶対この女子と行きたくないと思っていた。

しかし…

「分かった。一緒に行つてやる。けど緒里を悪く言うのはこれっきりにしろ。こっちがイライラする」

「いいよっ紅羽君と一緒に行ってくれるなら」
「ただし、つまんなかったら帰る。それでいいよな？」
「うん！私と一緒につままないわけないもん！じゃ、時間とかは後日。楽しみねえ」

「はあ…」
「すみー終わった？」
「ああ、取り敢えずな…」
「じゃあ帰ろ！お腹へったよ」
「おお。待たせて悪かったな」
「全然だよー」

門を出て少し歩いた所に夏祭りが開かれる神社がある。
神社ではもう夏祭りの準備を始めていた。

「すみ！もう準備してるよ！今年も一緒に…」
「ごめん」

緒里の言葉を遮るように謝った。

「もしかして…誰かと約束…」
「させられた…俺はいつも通りお前と…」
「…一緒に行くのは女の子？」
「…ああ…」
「さっきの子？」
「…」
「二人つきりで？」
「…」

「やだああああ!!」

緒里が突然叫び出した。

「やだ! 絶対やだ! 私だって澄斗と行きたい。毎年行ってたのに…
…さっきの子に言ってくる」

緒里は学校に引き返そうとしたが、澄斗に腕を掴まれて歩くことができなかった。

「ちよっ…待てよ…あいつに言ったってどうにもならないと思うぞ
…」

「なんであの子を庇うの! 澄斗とあの子がそういう仲でも、私は…」
「何言って…」

緒里は掴まれていた腕を振り払い走って家の方向に帰っていった。
澄斗は緒里が何を言いたいのか理解できないまま走って行った方向を見つめていた。

）

「それから緒里は俺を避けるようになって…俺も何が悪かったのか
分かんないから謝れなくて…」

「鈍感」

「なっ」

幸芽は一言で遮った。

「でも事故には関係無さそうね。言い切れないけど」

「だといいんだけど…ごちそうさま」

「はいはい。澄斗、明日学校は行きなさいよ？」

「え。普通に休もうと思ってただけど…」

「何言ってるの！緒里ちゃんが行けない分、あんたがしっかり授業受けてきなさい！どうせ夏休み前であんまり授業ないでしょ？緒里ちゃんの所には私が行くから心配ないわ。」

「…分かった」

最後の澄斗の顔は渋々といったような表情になっていた。

「取り敢えず…文集とか…かな？あんまり持って行って混乱させるのも嫌だしなー」

『にやーにやー』

「ジャム…緒里がな、思い出全部忘れちゃったんだよ。お前の事も分覚えてないんだ」

『なー？』

「はははっお前に言ってもだよなー…何持ってる…」

緒里の記憶を取り戻すきっかけを作る為に何か持って行こうとアルバムなどを漁っていた澄斗の部屋は夜遅くまで電気が付いていた。

第五話

「行つてきまーす」

「行つてらっしゃーい！ 帰りはまっすぐ病院行くのね？ 私家にないから一旦帰るなら鍵忘れないでね」

玄関で二人が話しているとジャムがゆっくり歩いてきて戸を引っ掻いた。

「ジャムちゃん、もう帰るの？」

『にゃー』

「こいつの帰る場所が何処なのやら」

『にゃー？』

「それじゃ」

「はいはい、気をつけてー」

玄関を出てすぐ、ジャムは走ってどこかへ行ってしまった。

澄斗は学校で緒里の事をどうしようかと考えながら歩いていた。

大勢で騒ぎたてるのは嫌だし、でも知らないで長期間いないのもどうかと思ったからだ。

それに記憶が戻らなかったら…

そう考えて頭をブンブンと振った。 結局答えが出ないまま、教室についてしまった。

教室のドアに手をかけようとして、中から聞こえた声に目を見開いた。

「あー、石坂が記憶喪失で入院してるらしいぞー！」

「ええー！？まさか、嘘でしょー？」

「それが本当なら紅羽君知ってるのかな？」

「じゃあ今日石坂いないんだ」

なんで知ってるんだ…そう思った矢先に教室の後ろのドアが開いた。

「紅羽君」

出てきたのは夏なのに制服の上からカーディガンを着ていて、髪を片方に束ねている女子だった。

名前は田原瑞穂【たはらみずほ】。

「ちよつといい？」

瑞穂は手招きして呼んだ。

クラスの会話も気になる澄斗だが教室に入りたくもなかったので、取り敢えず彼女に付いて行っって見ることにした。

連れて来られたのは今は使われていない空き教室だった。

「座つて。紅茶とコーヒー、どっちがいい？」

「いや、授業始まるじゃん」

「大丈夫。先生に出席扱いにしてもらえよう頼んどいたから。…私眠いからコーヒーでいいかな」

「どうやったんだよ…っつかもう決まってるなら聞くなよ…」

瑞穂は電気ポットでお湯を沸かしていた。

ピーと音が鳴り、カップにお湯を注ぐ。

「角砂糖は一個だね。学校の裏の喫茶店を石坂緒里と利用するとき
は一個半。砕いてから入れる。」

澄斗は口を半開きにして固まっていた。
今言われた事が全て当たっていたからだ。

「じゃあ本題に入る。石坂緒里の事故の事。」

緒里の事故の事と言われ、意識が傾いた。
さっきの事はまあいいや状態だ。

「何か知ってたのか！」

「知ってる訳じゃない。色々調べたんだけど、あの事故には不明な
点が多すぎるの。事故って言っているののかも、分からない」

「は…？」

「石坂緒里は踏切の所で倒れてたのよね。でも、あの時間帯はしば
らく列車が通る事はない。」

「その時偶然臨時で通った可能性だって…」

「無いと思う。列車に跳ねられたらあんな傷じゃ済まないし」

「奇跡的につて可能性は…！！？さっきから何が言いたいん…」

澄斗が言い終わる前に、教室のドアが勢いよく開いた。

「みずぽん、おっはよーっ！！」

「だ…」

「柚葉【ゆずは】…」

「風川【なぎかわ】 ああああ！！」

澄斗と瑞穂の二人は何か言いかけたが、入ってきた女子の後ろを追いかけてきた男子の声で遮られた。

入ってきた女子は風川柚葉、その後ろにいるのはこの学校の生徒会長だ。

「げっ…かいちょー…」

「げ、じゃない！てめえ、シャツの長さを直せと何回言えば！しかも遅刻だ！大人しく自分の教室に行きやがれえー！」

「いいじゃん！ちよつと大きいの買っちゃったんだもん！きつとまだ伸びるから大丈夫！」

「うるせえ！お前の成長はとつくの昔に終わってんだ！」

「ひどい！今のは一番傷付いたよ！…瑞穂、私ココア」

「田原、俺コーヒー」

物凄い剣幕で言い合った後、二人は各々飲み物を言って教室に入ってきた。

「はあ…仲が良いのは結構だけど…はい」

「わぁーい！ココアココア」

「すまないな」

「ふう…おいしかった、ごちそうさまー！」

「今から話すのに何で一気に飲むんだ…」

「柚葉、どう？聞き出せた？」

「うん…とその前にね…」

柚葉は澄斗の方を見た。

「緒里は元気？」

「はあ…落ち込んでるような感じはあるけど…具合悪いとかは無いみたい…っていうか緒里の事知って…」

澄斗は不思議に思った。

この柚葉と緒里が一緒のクラスになったことはなく、二人の接点
が思い付かなかったからだ。

「うん…緒里は私の恩人で…ってこの話は今いらないのー！まあ…
だからね…私も手伝える事は手伝いたいの」

「あ…ありがとう…」

「えへへ…よろしくね！」

柚葉は笑顔を見せたが、すぐに真剣な顔になった。

「じゃあ本題に入るよ」

第六話

「瑞穂、あの踏切の近くにいた奴らに聞いてみたけど、やっぱり列車はあの前後二、三時間は通ってなかったみたい」

「近くにいた…奴ら？」

「うん、まあ…あの辺にたまってる不良？みたいな奴らね」

どんな手を使ってそんな人達から話を聞いたのか気になった澄斗だった。

そんな澄斗をよそに瑞穂は生徒会長を見て言った

「佐義【さぎ】君お疲れ様だったね」

「本当だよ！もうこいつの付き添いはごめんだ」

「その台詞は何回目かしらね」

「う…」

「別にかいちょーに迷惑かけた覚えはないんだけどー」

「精神が！精神がね！すり減るのお！！」

「と、いう事でね」

ようやく瑞穂が澄斗を見た。

「やっぱり列車は通ってなかったの」

「けど…その人が本当の事言っただけかもしれない…」

「それは無いと思うぞ」

澄斗が言い終わった瞬間に佐義が言った。

「風川に嘘言つて、後でバレたら恐ろしい事に…」

「ならないよ！私を何だと思ってるのさ！」

「じゃあ言ってみろ！昨日あいつらに言つた事を！」

「えー？どれ言えいいのー？…んと…」

「本当の事言わないとドラム缶に入れて火にかける…だっけ？大丈夫だよー嘘じゃなかったらやんないし」

こんな人の恩人だなんて…緒里は一体何したんだろう…と疑問に思つた澄斗。

さつきから疑問が積もる一方だった。

「じゃあ…本当なのか…」

「そう。それでは、どうして石坂緒里は踏切付近で倒れていたのか」

澄斗が言つと、向かいにいた瑞穂が人差し指を立てて言った。

「列車が来なくなる時間帯の前に通つた列車に跳ねられたつてのは？」

「石坂緒里についた傷は三十分以内についた傷だったと推測されている」

「なあ…さつきから気になってるんだけど…」

「何かしら」

「何でそういう事まで知つてんだよ」

一番澄斗が気になっていたこと。

それは何故、自分もまだ知らない事を瑞穂が淡々と話すのかだった。

「なんだ、みずぼんまだ言つてなかったの？つていうか紅羽君も知らなかった？」

「は？」

「みずぼんは情報処理が得意でねーその上口もかたくて情報漏洩もないから、ちよつとした事件とか事故なら瑞穂にも手伝ってほしいって要請がくるの」

「はいー！？」

同じクラスの人の事なのに知らなかった澄斗。

そんな人と話していたのかとちよつと感動したりもしていたのだった。

「まったく…ペラペラペラペラと…ん…何か引つかかるわね…柚葉」
「ふん？」
「ちよつと外行つて来て貰えるかしら？今。佐義君も…って佐義君？」

佐義は腕を組んで座ったまま眠っていた。

「まったく…」

「私一人でも大丈夫だよ？」

「駄目！…一人は危ないから…そうだ、紅羽君連れて行きなさい」

「むう…大丈夫なのに…」

柚葉は頬をぷうつと膨らませて不満そうな顔をした。

「聞き取り内容は後でメールするわ。昨日の場所に行つてほしい。柚葉達の事は監視カメラから見てるから」

「おっけー」

「監視カメラ？」

「こっちは私の個人的にやってる事なんだけど…まあまあ気にしない！」

この町にいるのが少し不安になった澄斗だった。

第七話

「紅羽君歩くのは初めてだね」

「そもそも今日初めて会ったじゃん」

「そうだそうだーでも私は紅羽君の事、前から知ってたんだよ？」

「え」

「緒里から愚痴とか…愚痴とか愚痴とか…色々聞いてたから」

「愚痴しかねえじゃねえか」

そんなに言われてたのかと少し肩を落とした。

「やっぱり嫌われてんのかなあ…俺」

「嫌ってたら、一緒に夏祭り行きたかったなんて言わないと思うけどなー」

「え…ああ…そんな事まで喋ったのか」

「一番の原因はこの鈍感さなんだろうな…」

ぼそつと柚葉が呟いた。

「何か言った？ごめん、聞き取れなかったんだけど…」

「いやー？何でもない！っとー着いた着いた」
目的地に着いた二人。

そこで柚葉の携帯がなった。

「おーきたきたー。さすがみずぽん…ふむ…」

柚葉は携帯を見ながら唸っていた。

彼女がふと顔を上げた次の瞬間、二人の頭上には真っ直ぐ降りかかってくる金属の棒があった。

しかもそれは一本二本どころではなかった。

「なっ…!？」

「紅羽君、こっち…!」

柚葉は動けなくなった澄斗の手を引っ張った。

澄斗の方は、自分でもよくわかっていないままただ足を動かしただけ。

微妙なステップを踏みながら澄斗を安全な方向に引っ張っていた柚葉はしばらくして立ち止まり、金属の棒の雨が治まったのを確認した。

「紅羽君、怪我は？」 「だ…大丈夫…けど…」

「傷一つ負ってねえってかあ！」

澄斗が息切れしながら答えている途中に、低い男の声が響きわたった。

第八話

「あんたがこの辺仕切ってる人？」

「ああ？まあそんなとこだ。お前は随分丸くなつたなあ？風川柚葉あ」

柚葉の肩がびくりと跳ねた。

「昔は…」

「やめて」

「今はその話関係ない」

「そういえば今日はあの男じゃないんだな、あ？そっちの奴には聞かれたくないってかあ」

そう言つて男は笑つた。

「お前最近俺んとこの何人がボコつてんだろ」

「そっちが先に仕掛けてきたのよ。女子高生に鉄パイプ向けたり、何か古いし。年下の女子にする事じゃないんじゃない？」

「男五、六人をまとめて押さえる奴のどこが女子だつて」

「まあいいわ。私が話しに来たのはそんな事じゃないし…聞きたいことがあんのよ。大人しく質問に答えてくれる？」

「俺がお前をボコつてまだ生きてたらな」

「…はあ…なんかセリフおかしいし…っていうかあんまり怪我して帰ると…かいちよーがうるさいんだけどな」

鋭くなっていた目つきがいつも通りに戻った。

相手の男が刃物を手にしていたのだ。

小さいナイフではあるが、切れることには変わらない。

「ちよつとー！刃物とか聞いてないよ！？反則！反則ー！」

柚葉は腕をぶんぶん降った。

先程の態度とは大違いだ。

「殺し合いにルールはねえと思うんだけどよぉ！」

男はそう叫ぶと、ナイフを振りかざした。

「刃物はねえ…犯罪だよ！何て言うんだっけえ…つと…わかんないけど！…わっ」

柚葉はナイフをかわしながら言う。

完全に蚊帳の外だった澄斗が銃刀法違反の事かと心の中で呟いた。

「このままだと終わんないかも…」

柚葉は小さく言うと、スカートのベルトに挟んでいたものを素早く取り出した。

それをナイフに当てると、ガツッと短く音がした。

「ああ？」

「あー…とりあえずね、話聞いてほしいの。なんで喧嘩に発展してるのかわかんないし…ね？」

「折りたたみ式の傘…か」

男はナイフを遮った物を見て呟くと、静かに持っていたナイフをおろした。

「まず言ってみる。答えるかどうかはそれからだ」

柚葉はふうつと息を吐き、少し笑って男に言った。

「ありがと。この前近くであつた事故のことなん…」
「待て。やっぱりそれか」

柚葉の言葉を男が片手を出して遮った。

「その件に関しては何も喋れねえ。何も知らない」

「なんで？なんで話せないの？みんな揃って…何か知ってるんですよ？まさか、あんた達がやったんじゃ…！」

「違う。俺達は何もしてないって信じて貰えるまでは何も喋れねえんだ」

「今、私が信じるよって言ったら、その私の事は信じてもらえる？…さっきあなたは本気で私を潰そうとしなかった。長引かせて、私を一旦引かせようとしたよね。前半戦、私は傘無しじゃ対応できないような状況だったけどついさっきまで出さなかった。けど私は怪我一つしてない。ナイフの振り方だって、少し遅かった」

「手加減したでしょ？」

「…はあ…ったよ…やっぱりあんたにはかなわねえな…さすが…」
「おおっと、今はその話は禁止だぜ？」

柚葉はふざけたように言っ
て片目を瞑った。
そして澄斗は呟くのだった。

「俺、来た意味あんのかな……」

第九話

「あの日、女の子が倒れてたんだよね？その子に痣があつて…でも重傷って訳じゃなくて…記憶は…無くなっちゃったんだけど…」

柚葉の声が段々小さくなっていく。

「でもあの傷ね、発見された時より少し前とかに付いたような傷じゃないみたいなの。それで、発見する前には誰も通らなかったのになって」

「俺達は何も喋れねえって言ったのに少し関連するんだけどよあ…その日は俺ら、バラバラに行動しててこの辺りにはあまりいなかったんだ。全員自分がどこで何してたか証明できねえから…」

「アリバイがないから誤解を招くような事も言えなかったのね…」
「あの子、いつも猫連れてた子だよな？この奴ら、結構あの子の世話になってたんだぜえ？傷の手当てとかしてもらったしな」

その言葉に澄斗は驚く。

自分の知らない間に緒里は何をしていたのか…こんな恐そうな人達と…

それと同時に、いつも連れてた猫というのはジャムの事だろうかとも思った。

「そつえばあの日も猫連れてんの見たって奴がいたなあ…事故の前に」

「それ本当！？」

「ああ」

「よっし、収穫ありよ。ありがと！紅羽君、帰ろ！」

柚葉は男に礼を言うと、澄斗のいる場所へと走る。
しかし二、三步走ったところで男に呼び止められる。

「おい！」

柚葉は顔だけ振り返った。

「俺らは出来ることなら協力してやる。あの子、また連れてきてくれ！」

「ありがとう！緒里、絶対連れてくるからね！」

それだけ言っつて、今度こそ澄斗のもとに走ってきた。

「俺、ずっと蚊帳の外で何もしなかったんだけど」

「いーのいーの！逆に、その方が良かったし。かいちよーはいつも邪魔するし。学校戻るよ！」

「…おう…」

第十話

二人は学校に着くと、先程までいた教室に向かった。

「ただいまーっ」

「おかえりなさい、お疲れ様。」

「おかえり」

行く前は寝ていた佐義も起きていた。

「あ、かいちよー起きたの」

「ん…ついさっき…」

まだ眠いのか、目をこすっている。

「本当についさっきなの。まだ寝ぼけてるみたいなんだけど…」

「風川…」

「なにー？」

佐義はいつもと違うふにやふにやした声で言う。

「お前…怪我とか…無かったか…？」

「え…」

予想もしない事を言われて返答に困っている柚葉が何か言う前に…

「っ…!!…いや、違って！そうじゃなくて！…そう！お前が怪我し

て動けなくなったりしたら生徒が困るからっていうそういう意味で言った訳であって！」

佐義がようやく我にかえり、あたふたと弁解している。

「うん。わかってるよ。大丈夫、ありがとう」

「紅羽君紅羽君」

そんな二人を見て瑞穂が澄斗にこっそり言った。

「私、いつもこれ見てイライラしてるんだけど」

「確かに。生徒会長も素直になればいいのにな」

「柚葉もなんだけどね」

第十一話

色々騒がしくなったが、それも落ち着き、今は四人共椅子に座っている。

「で？どうだったの？」

「うん、あの日はみんなバラバラに行動してたんだって。現場には発見されるまで近付いてないみたい。アリバイを証明できないから全員疑われても否定ができない。だから下手な事喋れないみたいなんだ」

「なるほどね。他には？」

「うーん…あ、あの日に緒里が猫つれてるの見た人がいたんだって…関係ないかな？」

「猫…？」

「ああその猫な、俺達はジャムって呼んで…野良猫みたいなんだけど俺達が小さい頃から近くにいて…」

「紅羽君！」 澄斗が話している途中で柚葉がバンツと机を叩いて立ち上がった。

「野良猫をむやみに可愛がったら駄目なんだよ！ちゃんと飼って…それで…」

「風川落ち着け。紅羽、気にしないでいいから」

佐義がストップをかけた。
しかし柚葉は止まらない。

「かいちょーは黙ってて。私は懷いてもらえないのに…そうやって近寄ってくるからって…！」

「どういう…」

「こいつ、動物大好きなのに嫌われるんだよ。動物に。だから野良猫なんかが触れるお前が羨ましいんだよ、な」

「ち、違う！嫌われてないし！か…かいちょーが一緒にいるから逃げられるんでしょ！？嫌われてるのはかいちょーだよ！」

「私の仕掛けたカメラに。柚葉が猫に逃げられてる映像が映ったことがあるけれど」

「瑞穂ー！フォローしてよー！」

「面白いから」

「いやああー！……もう帰る！」

「そうね、今日はこれ以上進展しなさそう。みんなお疲れ様」

「ちよつと位引き止めてよ」

「じゃあ引き止めてやる。風川…」

「かいちょー…！やつぱり私…」

「お前、授業あと一時間あるぞ」

「だいつきらい！」

「行くぞー。俺達を待つのは数学だ」

「しかもよりによって数学！？いやだ、私は帰りたい！…ちよつやめて！引つ張らないでー！」

佐義は、じゃあなと言い残すと柚葉を引つ張って出て行った。

「じゃあ俺も…」

「紅羽君。あなたのクラスは今自習よ。私が何とかしておくから病院に行きなさい」

「田原…」

「クラス一緒なんだから！さ、行った行った！」

「ありがとな。じゃあ行ってくる！」

「行ってらっしゃい」

互いに手を振り、それぞれ行くべき場所へと向かった。

第十二話

瑞穂の言葉に甘えて病院へ向かった澄斗。
記憶をなくした幼なじみのいる病室へ…

コンコンと病室の戸をノックする。
中から、どうぞと声が聞こえ、戸を開く。

「あ、澄斗。もうそんな時間？」

「母さん…」

「じゃ、私は先に帰るわね。緒里ちゃんの迷惑にならないように！
じゃあね、緒里ちゃん」

「あ、ありがとうございます」

ひらひらと手を振って病室を出て行ったのは澄斗の母である幸芽だ。

緒里はベッドに座ったままぺこりと頭を下げた。

「体調はどう？具合悪くなったりとか、ない？」

先ほどまで幸芽の座っていた、ベッドのすぐ横にある椅子に座りながら澄斗はきいた。

「はい。大丈夫です」

「そっか」

「はい」

沈黙ができる。

「私の両親、連絡が取れないみたいなんです。」

沈黙を破ったのは緒里の方だった。

「海外に行っているみたいで…」

「そうなんだ…」

「はい。…良かったです。幸芽さんと澄斗君がいてくれて。」

澄斗君と言われて澄斗はチクリと胸の痛みを感じた。

緒里は普段澄斗の事を呼び捨てで“澄斗”か、省略で“すみ”と呼んでいた。

それに丁寧語というのも。

なんだか距離があるみたいな、そんな感じがした。

「そっか…俺も母さんも出来ることはする。何でも言っていていいから
「ありがとうございます」

「俺、今日色々持ってきたんだよ。ほらアルバムとかさ。無理して
見なくてもいいんだけど…置いてくから、暇だったら」

持っていた紙袋を揺らした。

その紙袋を見ながら緒里が口を開いた。

「あの…良かったらそのアルバム、今一緒に見てもらえませんか？」

「え…大丈夫？無理しなくてもいいんだけど…」

「無理なんてしてません！見たいんです。…不安なんですよ。自分
がどうだったかもわからないっていうのは」

「…わかった。んじゃあ、どれから見る？幼稚園からいくか？…あ、
幼稚園前もあるけど」

澄斗が紙袋の中を漁りながらきいた。

「な…なんか私の本能がそのあたりは黒歴史だと告げてるのですが…！」

「何だよそれ。可愛いのに…」

「か…かわ…！？」

澄斗が呟いた言葉に顔を赤くさせながらわなわなとする緒里だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9692u/>

summer memory

2011年10月9日04時29分発行